

英語の形容詞の談話における 限定用法と叙述用法 — 日本語との対照 —

皆島 博

1. はじめに

英語の形容詞には大別して限定的(Attributive)用法並びに叙述的(Predicative)用法との二つの用法がある。しかしながら、実際に英語の形容詞が用いられる状況、すなわち談話の観点から見て、これらの二大用法のうちどちらかに優位性があるということは言えるのか。また、英語の個々の形容詞はそれが含まれる上位概念としての意味領域の違いに応じて、限定用法か叙述用法のどちらかに偏ったりするということはあるのか。

本論ではこれらのことを、サンプルとして選定した英語の「基本的な形容詞」の談話における限定用法と叙述用法における現れ方を観察することにより、日本語との対照をも考慮に入れつつ検証することになる〔注1〕。

2. 英語の形容詞の限定用法と叙述用法

2. 1. 形容詞の用法

英語の形容詞には大別すると限定用法と叙述用法との二つの用法がある(大塚・中島(1987: 25))〔注2〕。

- (1) a. young man [限定用法]
- b. something good [限定用法]
- c. He is young. [叙述用法]
- d. It seems good. [叙述用法]

形容詞の限定用法は、上の例で言えば、名詞の“man”が形容詞の“young”と結合することにより [young [man]]_{NP} のように新たな名詞句（内心構造）を構成する。つまり、主要部となる名詞と結合して、さらに複雑で豊富な情報量（意味内容）を担った名詞句を構成するのである。すなわち、形容詞の限定用法は「名詞指向的」用法と言えるであろう。

これに対して、叙述用法は形容詞が名詞と結合し「主語－述語」という統語関係に組み込まれるわけであるが、上の例で言えば、形容詞“young”が繫辞“is”と結合することにより He[is [young]]_{VP} のように動詞句を構成する。すなわち、形容詞の叙述用法は「動詞指向的」用法と言えるであろう。

- (2) a. 限定用法：名詞指向的用法
- b. 叙述用法：動詞指向的用法

2. 2. 形容詞の談話における限定用法と叙述用法

英語の形容詞が談話において限定用法と叙述用法に関してどちらに優位性があるかということに関してはThompson(1988:174)で言及されている。

表 1：談話における形容詞の限定用法と叙述用法(Thompson 1988:174) [注3]

<u>Discourse functions of 308 adjectives in English conversation</u>	
Predicating a property of an established discourse referent:	79%(N=242)
Introducing a new discourse referent	21%(N= 66)
Total:	100%(N=308)

これに関連して、筆者が日本語に関して調査した日本語における限定用法と叙述用法の頻度の統計を次に示す。

表 2：日本語の談話における形容詞の限定用法と叙述用法

談話（口語）	cf. 新聞記事（文語）
叙述用法：66.2%(数= 712)	63.5%(数= 353)
限定用法 33.8%(数= 363)	36.5%(数= 203)
合計： 100%(数=1075)	100%(数= 556) (『朝日新聞・朝刊』1992/7/7/火)

この結果を見る限り、形容詞は英語と日本語ともに談話においては明らかに限定用法よりも叙述用法の方に優位性がある（頻度が高い）ということが言えるであろう。しかし、これらの統計は特定の意味領域に含まれる形容詞に調査の対象を限定して行われたわけではなく、形容詞一般を対象に行われたものである。

そこで次の節では、まず第一に、意味論的に最も典型的と思われる形容詞の意味領域を選定し、そして各々の意味領域に含まれる個々の形容詞を対象に談話における限定用法と叙述用法の頻度の統計を示し、両者の用法に優位性の違いが現れるかを検討する。そして第二に、個々の形容詞の属する意味領域の違いによって、この優位性に差異が生じることはあるのかということも検討する。

3. 基本的な形容詞の選定

理想的には全ての形容詞を対象にして限定用法と叙述用法の頻度を調査すべきであろうが極めて困難なことなので、「たたき台」とも言うべき基本的な形容詞を選定する作業から始める。

3. 1. 上位概念としての形容詞の意味領域選定

まず第一に、個々の形容詞が含まれる上位概念としての意味領域の選定から始める。選定基準とするのは、その意味領域が「典型的に形容詞的な」意味領域であるかどうかということである。

Dixon (1977)は形容詞が閉じた体系を持っている（形容詞の数が限られている）いくつかの言語の形容詞を調査して、プロト・タイプの形容詞の意味領域を7つ設定している。

1. DIMENSION -big, little, long, wide,...
2. PHYSICAL PROPERTY -hard, heavy, smooth,...
3. COLOUR -black, white, red,...
4. HUMAN PROPENSITY -jealous, happy, clever, generous, proud,...
5. AGE -new, young, old,...

6. VALUE -good, bad, pure, delicious, ...

7. SPEED -fast, slow, quick, ...

これらを参考に本論では個々の形容詞が含まれる上位概念としての基本的な意味領域として次のような意味領域を選定する。しかし、これらはいくまで暫定的なもので決して包括的なものではない。

- (3) a. [空間] b. [物性] c. [温度] d. [色彩] e. [性癖]
f. [年齢] g. [新旧] h. [価値] i. [速度] j. [数量]

3. 2. 個々の形容詞の選定

次に上で設定した形容詞の基本的な意味領域に含まれる個々の具体的な形容詞の選定を行うことにする。選定基準は主として次の3点である [注4]。

- i) 語彙論的に基本的な形容詞
- ii) 意味論的に典型的な形容詞
- iii) 使用頻度が高い形容詞

これらの基準をもとに選定した個々の形容詞は次の通りである [注5]。

- (4) a. [空間]<BIG> <材イ> f. [年齢]<YOUNG> <ワカイ>
b. [物性]<ROUND><マルイ> g. [新旧]<NEW> <アライイ>
c. [温度]<COLD><ツメタイ> h. [価値]<GOOD><ヨイイ>
d. [色彩]<BLACK><クロイ> i. [速度]<FAST> <ハヤイ>
e. [性癖]<KIND><ヤサシイ> j. [数量]<MANY> <材イ> [注6]

本論ではこれらの形容詞をもとに談話における限定用法と叙述用法における頻度の統計を示す。もちろんこれらの意味領域に含まれる形容詞はここで選定したものだけに限られるわけではなく、意味領域の種類を増やすことは可能であり、またその意味領域に含まれる個々の形容詞の数を増やしていくことも可能である。本論では暫定的に一分析

のモデルとして、手初めに上記のような意味領域と形容詞を選定したのに過ぎない。

4. 意味領域の違いによる限定用法と叙述用法の統計上の頻度

4. 1. 特定の意味領域に含まれる形容詞の限定用法と叙述用法の頻度

ここでは上で設定した意味領域に含まれる形容詞の談話における限定用法と叙述用法の頻度の統計を示す。なお、個々の形容詞の限定用法と叙述用法のサンプルは英語、日本語共に全て小説、脚本あるいは対談などの会話の部分から採集したものである。

表3：談話における形容詞の限定用法と叙述用法の頻度

英語	日本語
限定用法：70.2%(数= 949)	32.8%(数= 345)
叙述用法：29.8%(数= 402)	63.5%(数= 708)
合計：100%(数=1351)	100%(数=1053)

この結果を見ると、特定の形容詞に対象を限定した場合、日本語についてはThompson (1988)の示した結果と同じような傾向が見られるが、英語については正反対の傾向が見られるということが言える。

(5) 談話における形容詞の用法の優位性

英語：限定用法(70.2%) > 叙述用法(29.8%)

日本語：限定用法(32.8%) < 叙述用法(67.2%)

英語の形容詞は現在でこそ比較変化をする以外には名詞のように屈折変化はしないが、古英語の時代には形容詞は名詞と性・数・格において一致し、形容詞はほとんどの印欧語においてそうであるように、名詞に準じた品詞であった、日本語の形容詞は伝統的な日本語文法では「用言」であり、実質的には動詞である。言い換えれば、上の2.1.で述べたように、英語の形容詞は「名詞指向的」であり、日本語の形容詞は「動詞指向的」であるということである。このことが談話における限定用法と叙述用法の優位性の差異

に反映しているように思われ非常に興味深い〔注7〕。

4. 2. 意味領域別の叙述用法と限定用法の頻度

ここでは、個々の形容詞が上位概念としての意味領域の違いによって限定用法と叙述用法に関して優位性において差異を生じるかということを百分率で示してある。

表4：限定用法と叙述用法の意味領域別頻度

	英語：限定 叙述		日本語：限定 叙述	
[空間]:<BIG>	79.2%	20.8%	<オホイ> 37.0%	63.0%
	(225)	(59)	(10)	(17)
[物性]:<ROUND>	83.3%	16.7%	<マルイ> 100.0%	0.0%
	(5)	(1)	(3)	(0)
[温度]:<COLD>	45.5%	54.5%	<ツメタイ> 30.0%	70.0%
	(15)	(18)	(3)	(7)
[色彩]:<BLACK>	80.0%	20.0%	<クロイ> 95.8%	4.2%
	(16)	(4)	(23)	(1)
[性癖]:<KIND>	16.7%	83.3%	<ヤサシイ> 39.3%	60.7%
	(1)	(59)	(11)	(17)
[年齢]:<YOUNG>	76.7%	23.3%	<ワカイ> 64.0%	36.0%
	(89)	(27)	(57)	(32)
[新旧]:<NEW>	93.0%	7.0%	<アタラシイ> 90.9%	9.1%
	(93)	(7)	(30)	(3)
[価値]:<GOOD>	54.4%	45.6%	<ヨ[4]イ> 25.5%	74.5%
	(323)	(271)	(197)	(575)
[速度]:<FAST>	27.3%	72.7%	<ハヤイ> 23.0%	77.0%
	(3)	(8)	(6)	(20)
[数量]:<MANY>	98.9%	1.1%	<オホイ> 12.2%	87.8%
	(179)	(2)	(5)	(36)

この表をもとに、今度は意味領域別に英語と日本語の形容詞の談話における限定用法

と叙述用法における頻度の階層を立ててみる。

表5：形容詞の限定用法と叙述用法の階層

英 語	日本語
[数量]*	
>[新旧]	[物性]
>[物性]	>[色彩]
>[色彩]	>[新旧]
>[空間]*	
>[年齢]	>[年齢]
>[価値]*	<+限定> [注8]
>[温度]	>[性癖] <+叙述>
>[速度]	>[空間]*
>[性癖]	>[温度]
	>[価値]*
	>[速度]
	>[数量]*

これを観察してみると、意味領域の違いに応じて限定用法と叙述用法で頻度の違いが生じているのは明らかであるが、英語と日本語とでは結果が全く一致しているというわけではない。ただし、*印を付けた意味領域を除外して考えれば、英語と日本語は全く同じ傾向性を示しており、ある種の階層を構成している。すなわち、英語と日本語の形容詞は談話における限定用法と叙述用法の頻度というパラメーターに関して何らかの連続体を構成しているようにも思われる。

したがって、次の節では形容詞は限定用法と叙述用法に関して連続体を構成するかという観点から、さらに結果を分析していこうと思う。

5. 形容詞は限定用法と叙述用法に関して連続体を構成するか

5. 1. 品詞間の連続性

Givón(1979, 1984)やCroft(1991)では名詞、形容詞及び動詞は意味論的に連続体を構成し、そして形容詞は意味論的に名詞と動詞の中間的な位置を占めるということが主張されている。

(6) "TIME-STABILITY SCALE"(Givón(1979)(1984))

- a. ...VERB, ADJECTIVE, and NOUN occupy different areas of continuum, and the scalar property of that continuum seems to be time-stability. (Givón 1979:14)
- b. nouns, adjectives and verbs distribute rather systematically along one coherent semantic dimension...(Givón 1984:51)
- | NOUNS | ADJECTIVES | VERBS |
|------------------|---------------------|--------------|
| most time-stable | intermediate states | rapid change |
- c. Croft(1991:133): Thus one may conclude that adjectives are semantically and pragmatically intermediate between nouns and verbs, which are themselves semantically and pragmatically highly distinct.

本論の初めに形容詞の限定用法は名詞指向的な用法で、叙述用法は動詞指向的な用法であると述べた。もし、GivónやCroftが述べているように名詞、形容詞及び動詞が連続体を構成しており、この連続性が何らかの形で限定用法と叙述用法の頻度の違いに反映しているとすれば、英語と日本語の統計の結果は似たようなものになることが予測される。ところが結果は英語と日本語とは完全に一致するものではなかった。次の節ではこのことをデータから得られた統計の結果と照らし合わせて考察する。

5. 2. 基本的形容詞の意味領域の階層

上の結果を見ると、最初に設定した上位概念としての意味領域のうちの7つ関しては英語と日本語で同じような傾向が現れていると言える。すなわち[物性][色彩][新旧]の意味領域は「名詞指向的」であり、[温度][性癖][速度]の意味領域は「動詞指向的」ということが言えるであろう。

- (7) [物性] [温度]
 N > [色彩] > [年齢] > [性癖] > V
 [新旧] [速度]

しかし、次の3つの意味領域[数量][空間][価値]に関しては英語と日本語とで全く違う結果が得られた。ただし、同じ意味領域が限定と叙述用法の頻度に関して英語と日本語とでは両極的な結果を示しているのは興味深い点である。

- (8) 英語：N > [数量] > [空間] > [価値] (名詞指向的)
 日本語：V > [空間] > [価値] > [数量] (動詞指向的)

6. おわりに

本論では英語の形容詞に関して、日本語との対照をも考慮に入れつつ、談話における限定用法と叙述用法について語彙論及び意味論的観点から観察してきた。この結果は次のように整理できるであろう。

	英 語	日本語
a. 談話における優位性：	+限定	+叙述
b. 意味領域別の優位性：		
α) [物性][色彩][新旧][年齢]	+限定	+限定
β) [温度][性癖][速度]	+叙述	+叙述
γ) [空間][数量][価値]	+限定	+叙述

この結果から、少なくとも、今回調査した形容詞に関しては、英語と日本語共に意味領域の違いによって限定用法と叙述用法に関する優位性に差異を生じるということ、そして英語の形容詞は「名詞指向的用法」指向であり、日本語の形容詞は「動詞指向的用法」指向であるということが言えるであろう。

また、本論の結果から、少なくとも、談話における限定用法と叙述用法に関しては、

GivónとCroftの唱えるような一元的な連続体は成立しない可能性があると思われる。もちろん10の意味領域と形容詞の統計だけからこのように断言するのは危険であるので、今後、意味領域の種類及び個々の形容詞の数を増やして統計を取っていくことによって結果の妥当性を検討することが必要であろう。

【注】

- 1) 本論で特に英語と日本語の形容詞に限定して扱う理由は、両言語とも形容詞という範疇が比較的明確に認定できる言語であるからである。
- 2) 日本語の形容詞に関しては次のようなものを限定用法と叙述用法として認定する。ここで言うところの限定用法と叙述用法は必ずしも伝統的な日本語文法における連体、連用機能などと完全に一致するものではない。i) この論文はおもしろかろう(未然形=叙述)、ii) この論文はおもしろかった(連用形=叙述)、iii) この論文はおもしろくない(連用形=叙述)、iv) 論文がおもしろく(補語的)なる(連用形=叙述)、v) おもしろく論文を書く(連用形=副詞≠限定・叙述)、vi) この論文はおもしろい(終止形=叙述)、vii) おもしろい論文(連体形=限定)、viii) 内容がおもしろい論文(関係節=限定)、ix) この論文がおもしろければ(仮定形=叙述)
- 3) Introducing a new discourse referentは全て限定用法であるが、Predicating a property of an established discourse referentには本論で言うところの限定用法が33例含まれている。したがって、本論で言う限定・叙述用法にあてはめて改めて割合を示すと、限定用法：67.9%(N=209)叙述用法：32.1%(N=99)合計100%(N=308)のようになり、筆者が日本語から取ったデータに近くなる。
- 4) Swadesh(1971:283)の基礎語彙100語に含まれる形容詞は、[空間]:big, long, small、[物性]:round, dry、[温度]:hot, cold、[色彩]:red, green, yellow, white, black、[新旧]:new、[価値]:good、[数量]:all, many, fullの17語であるが、各意味領域において使用頻度の高いものを選定した。なお、[色彩]に属する形容詞についてはBerlin & Kay(1969)の階層をも考慮に入れた。[性癖][年齢][速度]に含まれる形容詞が欠け

ているが、これらは筆者が使用頻度などを参考に選定した。英語の形容詞の使用頻度はThorndike(1931, 32)や竹蓋(1981)の順位表を参考にし、日本語の形容詞の使用頻度は国立国語研究所(1970, 1983)の報告を参考にした。

- 5) []は上位概念としての形容詞の意味領域を示し、< >は各意味領域に含まれる個々の形容詞を示す。
- 6) 一般に英語の数量形容詞“many”は限定用法が「普通」で(小稲(1958:94))、叙述用法は「まれ」であると言われるが、日本語との対照のため便宜的に選定した。
- 7) 皆島(1990)では「類型論的に見て英語の形容詞はより名詞に近く、日本語の形容詞はより動詞に近い」と結論していたが、統計の結果は談話の側面からこの結論を支持するものと言えよう。
- 8) <+限定>及び<+叙述>が表しているのは各用法の頻度が50%以上ということである。

【参考文献】

- Berlin, B. & Kay, P. (1969) Basic Color Terms, University of California Press.
- Dixon, R. M. W. (1977) “Where Have All the Adjectives Gone?,” in Where Have All the Adjectives Gone?, Mouton.
- 小稲義男(1958). 『冠詞・形容詞・副詞』現代英文法講座第二巻, 研究社.
- 国立国語研究所(1970). 『電子計算機による新聞の語彙調査』国立国語研究所報告37, 秀英出版.
- 国立国語研究所(1983). 『高校教科書の語彙調査』国立国語研究所報告76, 秀英出版.
- 大塚高信・中島文雄(監修). (1987) 『新英語学辞典』研究社.
- 皆島博(1990)「名詞的形容詞を持つ言語と動詞的形容詞を持つ言語：品詞の類型論」筑波大学修士論文.
- Swadesh, M. (1971) The Origin and Diversification of Language, Aldine·Atherton, Inc.
- 竹蓋幸生. (1981) 『コンピューターの見た現代英語』エデュカ出版部.
- Thomson, S. A. (1988) “A Discourse Approach to the Cross-Linguistic Category ‘Adjective’,” in Hawkins, J. A. (ed.) Explaining Language Universals, Blackwell.

Thorndike, E. L. (1931, 32) A Teacher's Word Book of the Twenty Thousand Words,
Bureau of Publications.

【英語資料】

- 『時事英語研究』. (1992, 93) 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 1月号. “Doing a Good Job!”,
“Correspondent's Corner”, “Film Dialogue of the Month”, 研究社.
- 『English Express』. (1992, 93). 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 1月号. “Crossfire”, “English
through Films”, “Larry King Live”, “Showbiz Today”, 朝日出版社.
- 田原ヒューマンデパートメント. (1987) 『日本を語る』 アルク.
- フォーン・クリエイティブ・プロダクション編. (1991) 『スクリーンプレイ“BACK TO THE FUTURE”』 監フォーン.
- フォーン・クリエイティブ・プロダクション編. (1991) 『スクリーンプレイ“BACK TO THE FUTUREⅡ”』 監フォーン.
- フォーン・クリエイティブ・プロダクション編. (1990) 『スクリーンプレイ“BACK TO THE FUTUREⅢ”』 監フォーン.
- フォーン・クリエイティブ・プロダクション編. (1991) 『スクリーンプレイ“INDIANA JONES 2”』 監フォーン.
- Bloch, R. (1983) Twilight Zone The Movie, Warner Books.
- Gash, J. (1983) The Vatican Rip, George Banta Co., Inc.
- Kahn, J. (1984) INDIANA JONES and the TEMPLE OF DOOM, Ballantine Books.
- King, S. (1976) Night Shift, New American Library.
- McGregor, J. (1992) Fawn Fools Around!, Carlyle Communications, Ltd.
- Milne, L. (1984) Ghost Busters, Coronet Books.
- Monteleone, T. F. (ed.) (1992) Borderlands, Avon Books.
- Shaw, B. (1951) Pygmalion, Penguin Books.
- Skipp, J. & Spector, C. (eds.) (1989) Book of the Dead, Bantam Books.
- Spillane, M. (1963) Me, Hood, New American Library.
- Welsh, L. (1992) Provincetown Summer & other stories, A Rosebud Book.
- Wesker, A. (1959) The Wesker Trilogy, Penguin Plays.

【日本語資料】

- 伊藤整(1961).『氾濫』新潮文庫.
梅崎春生(1989).『桜島／日の果て／幻化』講談社学術文庫.
大江健三郎(1959).『死者の奢り・飼育』新潮文庫.
川西蘭(1984).『春一番が吹くまで』河出文庫.
坂口安吾(1989).『桜の森の満開の下』講談社文芸文庫.
清水義範(1988).『永遠のジャック&ベティ』講談社.
谷崎潤一郎(1989).『美食倶楽部』ちくま文庫.
筒井康隆(1985).『串刺し教授』新潮文庫.
_____ (1992).『葉菜飯店』新潮文庫.
中島らも(1991).『人体模型の夜』集英社.
姫野カオルコ(1992).『空に住む飛行機』主婦の友社.
平岩弓枝(1981).『花の影』文藝春秋.
深田祐介(1983).『スチュワーデス物語』新潮社.
_____ (1987).『新人類スチュワーデス物語』新潮文庫.
_____ (1990).『トップスチュワーデス物語』集英社.
村松栄子(1992).『至高聖所』福武書店.
夢枕獏(1985).『悪夢展覧会』徳間書店.
_____ (1987).『獣王伝』角川文庫.
横溝正史(1976).『殺人鬼』角川文庫.
_____ (1979).『七つの仮面』角川文庫.
連城三紀彦(1986).『運命の八分休符』文春文庫.

A t t r i b u t i v e A n d P r e d i c a t i v e U s e
O f E n g l i s h A d j e c t i v e I n
D i s c o u r s e - A C o n t r a s t i v e S t u d y
W i t h J a p a n e s e -

Hiroshi MINASHIMA

It is generally said that English adjectives are used mainly in two ways.

- i) Attributive Use
- ii) Predicative Use

There are, however, two problems which are not so clear with English Adjectives.

- i) Do adjectives in English have some preference in relation to these two uses?
- ii) Do adjectives in English that are included in a particular semantic field have some preference in relation to these two uses?

In this paper I will examine the preference of these uses in English adjective by selecting what I call "Typically Adjectival Semantic Area" and "Basic Adjective". And in this paper a contrastive study with Japanese is also considered with regard to these problems.